

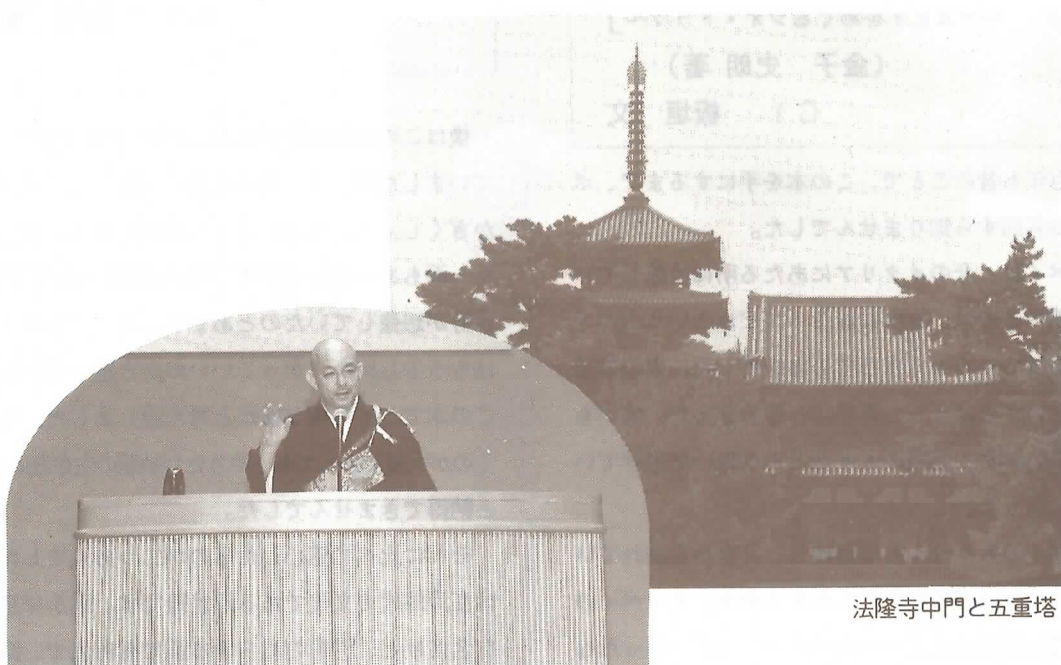
# 図書だより

<第32号>

平成7年2月22日

呉工業高等専門学校

図書委員会



法隆寺中門と五重塔

## 創立30周年記念講演中の高田良信師

平成6年10月21日 於：呉市文化ホール

演題 「世界文化遺産“法隆寺を支えたものは何か”」

## 目 次

### 〔読書感想文〕

歴史	「ポンペイの滅んだ日～ベスピオをめぐるジオ・ドラマ～」(金子史朗著) ……C 1	板垣 文 …… 2
	「江戸の町とくらし」(段木一行著) ……A 1	渡川 賢史 …… 2
文学	「受け月」(伊集院静著) ……C 2	佐藤 文紀 …… 3
	「遠い海から来たCoo」(景山民夫著) ……A 2	越智五津子 …… 4
政経	「あなたがホームレスになる日」(森川直樹著) ……M 3	松本 佳之 …… 4
	「他人が見える教育」(樋口恵子著) ……E 3	原 真由美 …… 5

### 〔随想・読書雑感〕

	「校外実習体験記」 ……M 4	延河 克明 …… 6
	「日本人とユダヤ人」 ……M 5	志水 洋 …… 7
	「人物 諸葛孔明」 ……E 4	大下 靖雄 …… 8
	「戦無派日本人のカンボジア」(下川裕治、中村正人著) ……C 4	芝山 直路 …… 8
	「火垂るの墓」 ……C 5	粟根 祐樹 …… 10
	「水と建築」 ……A 5	三浦 紀子 …… 10

### 〔新任教職員随想〕

	「愛読誌との出会い」 ……機械工学科	野村 高広 …… 12
	「生活リズムの大改革」 ……建築学科	松野 一成 …… 13

### 〔私の推薦する本〕

	「明治」という国家 司馬遼太郎著 日本放送出版協会 ……一般科目	有廣 圭司 …… 14
	「HONDA 360 STORY」吉田匠〔他〕著 三樹書房 ……機械工学科	野村 高広 …… 14
	「定性推論の諸相」西田豊明著 朝倉書店 ……電気工学科	加藤 裕一 …… 15

〔新着10選〕 …… 16

〔お知らせ〕春休みの長期貸出と休館について …… 18

〔編集後記〕 ……図書館長補 篠部 裕 …… 18

## 読書感想文

## 歴史

## 「ポンペイの滅んだ日

～ベスビオをめぐるジオ・ドラマ～」

(金子 史朗 著)

C1 板垣 文

千九百年も昔のことで、この本を手にするまで、ポンペイの名前すら知りませんでした。

ポンペイは、今のイタリアにあたる所に位置しています。ずっと昔に、そばにあるベスビオという山の噴火によってうめつくされてしまいました。火山の恐ろしさというのに今一つ実感はわきませんが、怖いものだと思います。当時の人々はどんな思いで逃げたのでしょうか。

ポンペイの人々はみんな避難し、災害から逃れていたというのが以前の見解だったそうです。ポンペイの人々は噴火の前はどこかへ逃げのび、命は助かったものと思われていたのに、新しい遺体が数多く発見されたのです。一室から多数の遺体が発見され、それまでの見解はくつがえされることになりました。

現代の科学技術ってすごいと思います。骨格などを調べるだけで、その人のしていた仕事や身分などがわかるのです。

その頃は、やはり身分がわかれていて奴隷もいたようです。奴隷はかなり過酷な労働をしいられ、筋肉、骨格がアンバランスです。しかし、それらの人々以外に関しては、極めて健康で良好だったそうです。それにこの人達の中に虫菌のある人はいなかったそうです。それは砂糖を使用していないためなのですが、この頃の人々は水準の高い生活をしていたのだなと思いました。

科学の進歩によって、火山活動のある程度現代では予測することはできるようになりました。けれどあの時、彼らはどのくらいのことを知っていたのでしょうか。死にたくなくて、必死だったと思います。生きたいと願い死に恐怖し、みんな亡くなりました。

ベスビオ山の噴火によってうめつくされた街、ポンペイ、ヘラクレス。今またその姿を再現しようとしています。正しい歴史を私達は知らなければいけないと思います。

## 「江戸の町とくらし」

(段木 一行 著)

A1 渡川 賢史

僕はこの本を読むまで江戸は華やかなイメージを持っていましたが、少し考えが変わりました。それは何だかぎくしゃくしているような部分もあり、知らなかった一面もあったからです。特に武士についての説明は、自分が想像していたのとあまりに違っていました。僕はもう少し何か、かっこいいのかと思っていましたが、この本でとても嫌な奴だと考え直しました。生きていくのが大変だとしても、やりたい放題の生き方にはちょっと納得できませんでした。

それに比べて感心したものが二つありました。一つは江戸時代の文化である浮世絵です。確かに日本でも有名だけど、世界のあらゆる国でも有名で、高く評価されていることは、うれしいし、誇りに思えます。しかも、浮世絵を作ったのが、僕らと同じ庶民というのがまたいい所でもあり、親しみが持てます。面白かったのが写楽の書いた浮世絵の話で、今僕達から見れば立派な作品だろうに、当時の描かれた役者はたいへん怒ったそうで、写楽の描いた役者の顔がアンバランスでめちゃくちゃだったからだそうです。

二つ目は、江戸の町が町人たちによって作られていた事です。どうしてそんな事に感心したのかというと、僕が中学校で勉強した江戸時代は外見は安定して落ち着いた様だけど、裏では手も足も出せないほど仕切られていたので、きっと暗く活気のない生活だろうと思っていました。でもそういう暗い所もあったでしょうが、それに負けない明るく活気のある生き方がうらやましく思えたからです。二つとも町人ばかりが関係しているけど、やっぱり現在の自分と同じような立場の人達がこんな生き方で土台になっているからこそ、歴史に江戸の町があるんだろうなと思います。本当に感心しました。

町のつくりにしても少し変わっている所がありました。またそういう所が何とも江戸らしいなあと思いました。

「江戸」という言葉を聞くと、僕はいい感じがして、いろんな想像をします。こういう表現が出来るのは、江戸にうらやましさがあり、この本で知った事で考えが変わったからだと思います。江戸の町もくらしも結局は人間が作り上げたもので、人間の良さというものが非常によく分かります。確かに悪い部分もあるけれど、昔の町でここまで有名な「江戸」を作り上げた当時の人々は本当にえらいと思いました。

文学

「受け月」 (第107回直木賞受賞作品)

(伊集院 静 著)

C 2 佐藤 文紀

受け月、はじめこの本にしようと思ったのは、テレビなどでも話題になった人だったのでこの本にした。

内容は野球を通して語られる人生であった。主人公の野球監督の谷川鐵次郎は、何度もチームを優勝に導いた監督であった。性格は、自分に厳しく他人にも厳しい監督であった。試合の時には新人選手を代打として起用する場合に、いきなり頬を平手打ちし、「行ってこい。」又、日本刀を鼻つつらにむけるスパルタ監督であった。しかし今年でその野球からは引退しなければならなかった。それは、当時新人の石井という人で監督に平手打ちされてヒットを打った選手で今は監督がたのんでくれたおかげでそのチームの専務をしている。その人が監督をやめさせようとした。それは監督の野球方針がきにいらなかったからだ。しかし石井専務の息子は谷川鐵次郎の孫娘に惚れてお父さんの反対をおしきって息子は結婚した。しかし今は息子は心臓の病気で入院している。孫娘のさやかは鐵次郎の妻の沙やと仲が良くいっしょに京都に旅行などする仲だった。その旅行というのはさやかのだんなさんの病気がなおるようにとお寺をまわっておまもりをあつめてまわる旅であった。その京都であった芸妓さんに受け月のことをきかされて、受け月に願い事をすると願い事がこぼれないでかなうということをきいた。孫娘のさやかはいろいろ祈ってもだんなさんが良くならないと鐵次郎に涙をこぼしながらいった時、「おまえがそん

な弱気でどうする。おれは野球しかしらんが、野球だって乗り切るんだと信じてグラウンドに立つ奴は笑ってベンチに帰ってくる。」というセリフを読んだ時とても胸が熱くなった。そういつて鐵次郎は合宿所へいった。合宿所ではひとりの投手が投球練習をしていた。鐵次郎は、その投手の江島に「なんな今の投球は、ワンバウンドになったことを怒っているのではない。わしに怒られたぐらいでビクつくおまえの根性を怒っているのだ。野球はピッチャーのおまえからはじまるんだぞ、おまえが女みたいな根性ならバックの八人もベンチもスタンドも女のような野球をやらされるんだ。」その部分を読んだとき、僕もその通りだと思った。僕は部活でバレーをやっている。それも野球でいうピッチャーのポジションのセッターをしている。僕のミスでずるずる負けていったこともある。又、バレーはチームワークの勝負だ。このことも監督はいていたのだろうと思う。

引退試合当日、それは孫娘さやかのだんなさんの手術の日でもあった。鐵次郎は祈るということが嫌いだったがその日はおまもりをもっていった。引退試合は鐵次郎におこられていた江島がなげて、監督生活最後をかざった。試合が終って孫娘さやかのだんなさんの手術が成功したというしらせを聞いた。僕は監督として最高の日になったと思った。試合後のうちあげが終わっての帰り道、ふと橋の上から空を見上げるとさやかのいっていた受け月がでていた。月は何かを受けるように盃の形になっていた。鐵次郎はその受け月に向かって両手をあわせ、さやかの婿が順調に回復するように祈った。そしてゆっくり歩きだした。すると家でまっている妻の沙やの顔が浮かんだ。「婆さんを忘れてたな。」と引き返そうと思ったが何か面倒臭く思えた。彼は橋に映った自分の影を見ながら、「婆さんにはどこか旅に連れてってやろう。」とつぶやきながら歩きだした。これからおわり二ページがとてもきにいっているそれは監督の性格がよくでているからだ。僕もやがては歳をとり、おじいさんになるが、この監督のようなおじいさんになれたらなあとと思います。

## 「遠い海から来たCoo」

(第99回直木賞受賞作品)

(景山 民夫 著)

A 2 越智 五津子

この本は高校生が読むような話ではないかと思ったが、直木賞受賞作品の中で最も簡単なように思えたので選びました。

あらすじは、日本人父子が南の島に行き、父親が海洋研究しているときに息子が恐竜の子供を見つけ、育てて海にかえす、といったようなものなのですが、もちろんその話の最中に色々な出来事が起こります。作者の景山民夫さんは、南の島の魅力を詳しくこまごまと書き表しているのが自分が体験しているような感じがして、私は心の中で近い将来絶対に、南の島へ行く決めてしまっていました。私を魅了させた部分の一つに、『朝起きてすぐ、はだしで海岸を走り、イルカ達と供に泳ぐ』という内容のものがありません。私の脳裏には、まっ白な砂浜とずっと遠くまで続く浅瀬、スカイブルーの海がうかびました。ハワイやグアムのCMなどでよく見ておなじみ、といった感じだが、実際には見たことがない光景でもあります。主人公の父親も夢のある人で、なんだか良いことづくめのような気もするが、そこが物語というところなのでしょう。

話のはじまりは、1頭の恐竜(?)が体をぼろぼろにしながらい子供をうむというところからはじまります。回遊コースから外れたため、体がぼろぼろになったのです。こういう、唐突なはじまり方がふつと少しちがうと思いました。こんなはじまり方によって、一瞬のうちに読者の頭の中に映像をうかびあがらせ、読むことをスムーズにさせる効果があるのでは?と私は思いました。

主人公の男の子が恐竜の赤ちゃんを見付け、父のもとへもちかえります。育てるための食事は、アザラシの本にのっていた、マーガリンが良いとか、こういうふうには時々マニアっぽくなるけれど、そこがまたおもしろかったです。私もし同じ目に遭遇したら、こういうふうにはすればいいのか、などと考えたりして、後からそのことを考えて苦笑したりしました。それほどまで私はこの本にのめりこんでいたのです。その他にも、恐竜赤ちゃん(後にCooと名付けられる)を実験

に、とぬすみに来た人達とたたかう際の身の守り方とか、なんだか勉強になったような気分でした。

その他にも南の島にあこがれるようなことがいっぱい書いてあって、物語の内容もとてもおもしろかったけれど、私にとってそれ以上に南の島の描写にとっても感動しました。

ずっと読んでみると、ハッピー・エンドになるだろうな、と予想は一応つくのですが、読んでいる途中はそんなことも忘れて、ハラハラ・ドキドキのしどおしでした。

最初にしたとおり、高校生には、少しおさなすぎると思いましたが、私の脳が幼稚なせいとか、とても楽しく読んでしまいました。ある意味で、この、「遠い海から来たCoo」のアニメ映画より、本の方が、鮮明な映像が頭の中にかんできて、ずっと心にのこると思いました。

## 政 経

## 「あなたがホームレスになる日」

(森川 直樹 著)

M 3 松本佳之

平成大不況の恐怖について

この感想文の題材になる本を探そうと、図書館に行き、僕の目にとまった本は、『あなたがホームレスになる日』というタイトルのものだった。心の中で「なるわけないじゃん」と思いつつも、手にとって目を通すと、そこにはホームレスの人々に実際に取材を行い、ホームレスとなっていった過程や、その生活ぶりが詳しく書かれていた。

「失業」という日本ではあまり切実さを伴わなかったこの言葉が、ここ数年の間に急に身近になってきたと思う。失業とは職を失うことであるから、収入をなくし、財産をなくしていく。そして何も頼るものがなくなった者は、路上生活者となるほかにないのではなかろうか。

相次ぐ企業の倒産や解雇、中高年者の再就職難、そして定職に就かず青い鳥症候群といわれる若者たちなど、平成大不況の回復策が見つからない今、路上生活

者の予備軍は確実に増えつつあると、この本の中では警告している。

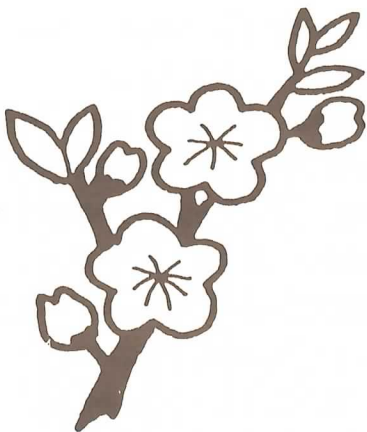
しかし、多くの人々は、僕が最初にこの本に対して思ったように、まさか自分が…という思いがあるはずだと思う。

だが、それは自分が切迫した状態に置かれたことがない者の考えだろう。この本の中には、避けられない事情や本人の行動とは無関係の状況から路上生活者となった元中小企業経営者、カード破産のビジネスマン、バブル破産の不動産ブローカー、ローンを払えなくなったマイホーム購入者などが大勢登場した。

そして本当に恐ろしいのは、一度路上で暮し始めたら、一般社会への復帰が非常に困難になっているという現実だ。

たとえば、借金苦のあまり世間を逃れホームレスになったものの、もう一度まじめに働いてやり直そうとする。しかし、ときたまありつく日雇い労働の賃金では、再就職のための身なりを整えることすらできないという。そして、一般の給料制の仕事では賃金は1ヵ月後であり、それまで暮す生活費がない。親戚や友人を頼ろうにも、一度ホームレスとなり社会の底辺に落ちぶれた者などに手助けをするほど、世間も甘くないだろう。

さらに著者によれば、日本ではホームレスの一般社会への復帰を助ける行政上のシステムが一切見当たらないらしい。アメリカのように、再就職に対して連絡先を代行したり、仮住居を提供するなど、さまざまな試みをしていく事が重要だと思う。



## 「他人が見える教育」

(樋口 恵子 著)

E 3 原 真由美

この本を読んで、これからのしつけや学校教育は本当に大変だと思いました。

昔(昭和三十年代ぐらいまで)は、子供が五、六人なんてあたり前、貧しくても一生懸命働く親の姿を見て育ち、兄弟間の遊びやけんかを通して上下関係を知り、生活の中で早く自立できるよう親にしつけられて育ちました。今は、核家族化が進み、経済は豊かになり、一人の子供にかかる愛情も時間も多くなりました。そして、子供はいつまでも親もとに子供でいることが可能であり、親は自立できない子供であることを喜んでめんどろを見ていう状況が発生しています。だから、いつまでもママがいないと何もできないマザコンや台所用品が一切ない家で生活する夫婦、過保護な親が存在するのです。受験戦争とかで、家の手伝いをする子は減り、勉強以外のことは全てムダなこととして、親の手で片づけられてしまい、子供は家族の一員として働くこともなく、上げ膳据え膳で育ち、生活の自立ができず、自分に不都合な事は全て冷遇として子供の目にうつっています。こういうことは本当におかしいことだと思います。親が働くことによって私達は食べさせてもらっているのだから、手伝いくらいはやるのが当たり前なのです。私は小学校の低学年ぐらいまでは何もしていませんでした。高学年になるにしたがって、親にガミガミ言われながら手伝いをするようになりました。うるさく言われる前にやっておおうという気持ちもありましたが、中学生になる頃には手伝いをするということがある程度家族を助け、協力していくことになっているのだということが分かりました。

最近、いじめを苦にして自殺をはかる子がいます。担任の先生は知らなかったと言います。気付かないはずはないと思います。陰湿な雰囲気が分からないというのは、相当鈍感でなければありえないはずです。校則違反にはうるさく言って、いじめには何も言わない。生徒を「よい子」に仕上げるのに一生懸命な先生。こんな学級教育はおかしいと思います。高度成長期の

中で育ってきた何デモ出来るのに、言われたことシカしないデモシカ先生、他人を思いやれず、自立もできない子供達。こんな人間ばかり増えてきている日本の将来は暗いように思います。外国では高齢化社会、経済成長の中での子供のしつけが形成されています。日本では超高速高齢化社会をむかえようというのに時代に対応した子供のしつけができていません。昔のよう

に五、六歳で自立してほしいとは思ってませんがせめて二十歳までにはどんな子供であっても自立してほしいと思います。

教育やしつけを受けることによって、他人をどう認識していくかが、私にとっては今後大事なことだと思いました。そしてまた、ちゃんと親から自立したいと思いました。

## 随 想・読書雑感

### 「校外実習体験記」

M 4 延河 克明

私達、機械工学科は4年生になると選択科目で校外実習というものがあります。これは、夏休みに会社へ実習生という形で働きに行くもので、その報告書を提出することで単位がもらえるのです。

私が実習に行ったのは、南区にある日本製鋼所（J SW）という会社です。この会社で2週間余りの間過ごしました。校外実習については詳しい事は知らなかったため初日はさすがに緊張しました。自分と他に3人の実習生と計4人でした。2人は大学生でもう1人は商専の人でした。会社までは電車で通うつもりだったのですが、少しでも長い睡眠時間が欲しかったので会社の独身寮に入ることにしました。ふだん電車通学の自分は、人生初の一人暮らしを体験することになったのです。食事は朝と晩は寮食で、昼は社員食堂で食べました。自分が世話になった課は、樹脂産機開発グループ（現在は樹脂機械開発グループ）という所で、主にプラスチック製品の生産機械の開発をしています。実習の期間、そこのグループのスペースには、自分の机も与えてもらって、そこにはパソコンもあり（使い方はよく分からなかった）、報告書もその机で書きました。とにかく初めて接する会社というものにどうしていいのかわかりませんでした。自分が座っている周りでは、おじさん達が働いている。パソコンと向かい合って考え込んでいる人もいます。主任に怒られている人もいます。現場では40℃近いなかで機械のテストをしてい

る。誰もが皆、自分で生活していくために働いていました。

それが当たり前なのかもしれないけれど今こうして親の世話になって学校へ通っている自分には、やはり厳しく見えました。今までの生活をその時改めて反省したのを覚えています。今の勉強が、会社に入ってからいかに大切な事なのか、という事を深く感じました。それを実際理解しているのといないのでは大きく違うと自分は思いました。加えて会社のなかで自分にかかる責任、人間関係、いろいろな事を知りました。寮での1人の生活は結構楽しかったと思います。仕事が終わって他の実習生と一緒に寮に帰って、いろいろ話をするのが一番楽しかった。会社では実習生は1人ずつバラバラに配属されるので、いろんな話が聞けるのです。夜遅くまで、誰かの部屋で語り合ったりもしました。だからいつのまにか、年も違うのにタメ口でしゃべっていました。良い意味で、いい友達ができました。その友達の中に長崎大学の人が出て、その人は、1人でヨーロッパにいて4ヶ月間いろいろな土地で生活したそうです。その話を聞いた時は、いろんな人間がいるもんだなぁとつくづく思いました。

話は変わりますが、一人暮らしというわけで一番めんどうだったのは洗濯でした。今まで親まかせだったので自分にはかなり負担になりました。洗濯機は一応全自動だったので初めての自分にもわかりました。あらゆる面でこの実習はためになりました。別にこの校外実習に行くことを勧めるわけではないけれど、就職する前に一度ぐらい会社というもの、企業というものに接するのもいい勉強になると私は思います。確かに貴重な夏休みを使って実習に行くのですから、少しはためらいもありました。バイトした方がいくらお金に

もなります。でもその分私はその実習で何かを得られたような気がします。会社で働くという事が、客観的ではあったけれどかなり近い距離で感じる事ができました。良い友達もできました。もちろん知識も増えました。自分の反省すべき点も見つかりました。並べてみるときりがなくらいあります。今年は、うまくいけば5年になります。そうなると就職活動と直面しなければならなくなります。そこの会社の方も、まだこの先もうしばらくは就職は厳しいんじゃないかというような事を言われていました。まだまだ景気の回復してないこの日本で、自分はどんな所で働くのか分からないけれど、なんとか自分のやりたい仕事を精一杯やりたいと思う。そのためには今の生活が活かせるように今を大事にしていかなければいけません。去年の夏の事でありましたが、自分にとってプラスになった体験だったので書いてみました。

## 日本人とユダヤ人

M5 志水 洋

口あけて はらわた見せる ざくろかな「外国人や外国文明に対する批評は、自己および自国民の潜在的欲望の表出である」とヤーシュヴ・ベン・ダーネルは言った。一度でよいから男女混浴をしてみたいとか、一度でよいから思い切って犬を殴打してみたいとか、一度でよいから、女性にかしずかれてみたいとか、一度でよいから月を眺めて放尿してみたいとか、さまざまな抑圧を、他国人に託して放散した上で、一転して今度はそれを批評し、あわせて自己の優越感を満足させる。といったやり方は、やっている御本人とその国民にとっては、格好なレクリエーションであろうが、対象にされた国民こそ、いい面の皮だといわねばならない。

「ユダヤ人は怠け者である。彼らは七日に一度必ず休むから」といった二千年前のローマ人以来、こういったレクリエーションの対象とされつづけたユダヤ人にとって、一部の欧米人の日本評ぐらいこっけいなものはない。

私は「さとき人は知恵を隠す、しかし愚かなるもの

は自分で自分の愚かさを表す」「愚かなる者のくちびるは、自分で捕まえるわとなる」「隣人をあなどるものは知恵がない」「剣をもって刺すように、みだりに言葉を出すものがある。しかし知恵ある人の言葉は人を医す」といった古きユダヤの賢者の言葉を正しいと思っている。従ってアメリカの率直さとは「理解していません」に外ならず、西欧的傲慢さとは「理解する気は毛頭ありません」に外ならないと思っている。ましてや「礼儀よりも真理」などというゲルマン人の言葉などには全く無縁で「優しい言葉は命の木」であると思っている。また、自分がごく平凡な人間であることは知っているから、「すぐれた言葉は愚かなる者には似合わない」という遺訓を守り、偉そうな言葉を並べたお説教などする気は全くない。にもかかわらず、両国民の文化も環境も歴史も余りに相違しているので、理解しようと努力しつつもなお理解しきれなかった点が多々あることと思うし、「言葉多ければ、とがを免れない、自分のくちびるを制する者は知恵がある」という教えを守れず、つつい非礼となったかもしれない。

どこの国でも現実の背後に「たてまえ」があり、その「たてまえ」と「現実」とには誤差がある。従って現実が同じでも「たてまえ」の方向は全く逆で、「現実」を「たてまえ」に近づけば、今までと全く正反対になる場合もあって不思議ではない。ハムレットの最後のせりふは「余もまた末期の一票を投じよう」である。王制では父が死ねば子が位をつぐ、これが当時の現実である。しかし「たてまえ」としては、あくまでも王は選挙で選出されたのであるから、あのせりふが出てくる。一方、日本では逆で、秀吉はあくまでも実力で関白になったのであって、実柄のゆえに関白の位をうけついでたのではない。しかし彼は、たてまえとしては、関白の位をうけついでいる。

一方は、実際には家系でありながらあくまでも選挙というたてまえをとる。一方は、実際には実力でありながらあくまでも家系というたてまえをとる。こういう例はいくらでもあって、現われ出た目前の現実が日本と酷似していても、たてまえの方向は全く正反対という場合は決して少なくない。だから、「私はかく見た」という現実から、日本では当然とされる筋をたどって一つのたてまえを想定し、そのたてまえと現実との相関関係を勝手に想定して、対象を理解したと思って

はならない。

これは、互いに交われば相互に理解できると単純に考えている日本人が余りに多いからである。飛行機の時代には、世界はもっと狭くなり、お互いに肩をふれあい、話し合う機会はますます多くなり、日常のこととなる。だが、それが相互理解に通ずるなどと、絶対に安直に考えてはならない。なぜなら、ユダヤ人はもう二千年も、西欧人と肩をふれあって生きているのである。

### 「人物 諸葛孔明」

E 4 大下 靖雄

諸葛亮孔明といえどどういう人物像を思い浮かべるだろうか。

劉備玄徳に「三顧の礼」をもって迎えられ、その恩に報いるため、智謀のかぎりを尽くし、“天下三分の計”を実践した孔明であろう。これは劉備、劉禅に忠誠を誓い、五度におよぶ北伐を敢行しながら、志半ばにして五大原に倒れた孔明につながっているだろう。

しかし、今までこう思っていたであろう孔明の顔はしょせん『三国志演義』による創作に過ぎない。たとえば、「三顧の礼」を待つまでもなく、劉備のもとを訪ねて、自分を売りこんだ自身家の孔明がある。

劉備はこのときもはや著名な將軍であった。二十歳も年下の孔明に「三顧の礼」をもってしてまで、迎えるにいったであろうか。逆に孔明もそれほどまでの人を三度も訪問させる無礼を行ったであろうか。中国は特に“礼”を重んじる国である、『魏略』という書物によれば、孔明が劉備のもとに己を売り込みに行き、その後三度訪れて、ようやく人払いが可能となり、語ったのが「天下三分の計」であったという。

さて、ここでもう一つ疑問が生じる。はたしてこの二人、言葉が通じたのだろうか。同じ中国人だと思うかもしれないが、広島人からみても東北弁や沖縄の言葉ですら理解できない言葉が多い。ましてや中国は日本よりはるかに広い。劉備は華北の 梟出身で現在の北京語に似た言葉であろうし、孔明は現在の山東省出身で山東語を母国語としていたはずである。加えてそ

のころ劉備は荊州にいて、荊州は楚語に分類できる。この三種の言語、系統さえ異なるほど、発音も表記も違う。おそらく読み書き堪能な孔明が筆紙をとって逐一文章にし、話をすすめたのではないだろうか。

こうして考えると、さまざまな疑問が生まれてくるが、この本には漫画などではわからない部分や、間違っている部分についていろいろ述べられている。三国志が好きな人にはぜひおすすめの本である。

### 「戦無派日本人のカンボジア」

C 4 芝山 直路

カンボジアには解けない謎が二つある。—————  
本書はこのような提起から始まっている。なぜ二百万とも三百万ともいわれる人々が、黙って殺されていったのか。なぜ、国連はカンボジアという小国に大規模に介入する必要があったのか。日本人犠牲者二人の死から一年半……。本書はその様な状況の中、ビジネスとして、ボランティアとして、学問の研究として、いろんな問題に戸惑いながらも、カンボジアに関わっている戦無派日本人たちの証言集である。

『カンボジア』と聞いて、すぐにピンとくる人は少ないのではないだろうか。今でこそ、自衛隊のPKO派遣等で名前だけは知られるようになったが、どういう国かというところまでは、あまり知られていない。僕もかつては全然知らない国だったし、全く興味も持っていなかった。しかし、ある時にテレビでカンボジアの特集があり、それを見て強いショックを受けたことがある。それは、およそ20年前、政権を握ったポル・ポト派によって、共産主義における「社会的実験」の名のもとで二百万人から三百万人が虐殺されたという事実があったということだった。

なぜ、このような史上まれにみる虐殺が行われたのか。そして、なぜカンボジア人は抵抗せずに素直に死を受け入れてしまったのだろうか。本書にも書いてある様に、カンボジアに関わる者全てが直面する問題である。

この問題に対して、本書は実際にカンボジアに暮らしている日本人たちへの聞き取りという形をとって、



日本人視点からのカンボジアに迫っているのである。

彼らに共通した思いは、まずポル・ポト政権の狂気に満ちた政策がこの様な結果を招いたということだ。中国の文化大革命に大きな影響を受けた指導者達が、駆け足どころか、全力疾走で共産主義社会を実現しようとしたことが、知識人達の虐殺へとつながっていった。

しかし、やがては、ポル・ポト派内部にまで肅正の嵐が吹き荒れ、自己崩壊へと向かっていってしまったのだが。

そして、もう一つ。カンボジア人の民族性ということである。長年の植民地だったことによる「長いものには巻かれろ式発想」。つまり、強い者には反抗しない。これが、その当時、クーデターさえ起こらなかった理由であろうと思われる。また、カンボジア社会にみられる小乗仏教的個人主義。殺されようとしている時さえ、それを運命と位置づけ、抵抗しない。縦社会のため、横との連帯感が生まれにくいなどの民族性。全てを民族性のせいにするのは明らかに問題があるが、原因の一つとなったことには間違いない。

やがて、ポル・ポト政権は内部崩壊し、代わって侵攻してきたベトナムによってヘン・サムリン政権が樹立された。当時の東側諸国はこの新政権を支持し、共産圏の拡大を恐れた西側諸国は、虐殺を行ったポル・ポト派さえも支持に回ったのである。カンボジアはいわば東西の代理戦争の場となった。そして泥沼化していったのである。

なぜ国連が大規模な内政介入をしなければならなかったのか。なぜ自衛隊がカンボジアに行ったのか。——東西冷戦が終わった今、国際社会はカンボジアの内戦に手をつける必要が無くなったからである。国連は、国連史上最大のオペレーションによって、内戦を終結させ、総選挙を行い、カンボジアに一からのやり直しをさせた。これがUNTACであり、自衛隊はその一端を担ったのである。

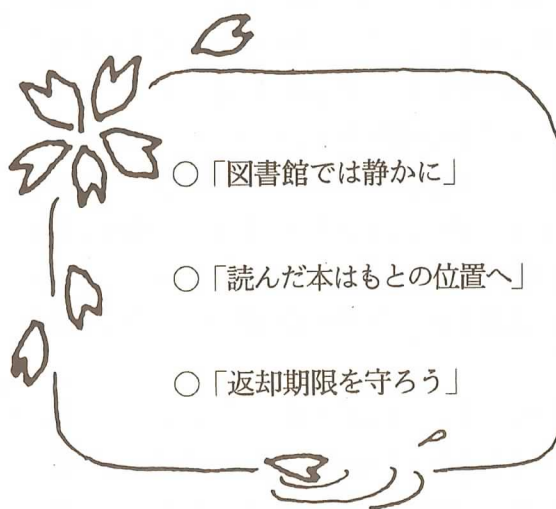
本書に登場する日本人の間でも意見は割れている。果たして、国連はそこまでする必要があったのかと——。各大国がカンボジア内戦に加担したという罪隠しの為に、国連PKO活動という美名を利用したにすぎない……という意見もあれば、カンボジアを立ち直らせるには、大がかりな介入が必要だったという意見もある。どちらにしても、カンボジア人が初めて民

主的プロセスを経て自分達の政府を樹立できたということは、それなりに評価できることではないだろうかと思う。

数百万ドルを費やし、数十人の犠牲を出したUNTA C。その主導によって行われた総選挙の結果、生まれた新生カンボジア。しかし、結局のところその新政府とポル・ポト派との間に現在も内戦状態が続いていることは、国際社会を大いに失望させている。「私は国連に謝罪する。我々の今の状況は（国連の活動に）値しない。カンボジアは自ら滅びようとしている。私にはもう分からない。」——シアヌーク国王はこう述べた。

また、世界中からの援助の嵐にも、日本人達は危惧する。「この国は援助なしでもやっていける国だ。計画性のない援助はこの国をダメにする。」援助はただあげるだけでなく、カンボジア人に何が一番必要なのかを考えてするべきだ。そうでない援助はしない方がましと彼らはカンボジアの地から警告している。

カンボジアがこれらかどうなるのかは分からない。ただ言えることは、このままだと本当に国際社会から見離される時がくるということである。カンボジアに興味を持つ一人として、真の平和がカンボジアに訪れることを願わずにはいられない。



- 「図書館では静かに」
- 「読んだ本はもとの位置へ」
- 「返却期限を守ろう」

## 「火垂るの墓」

C 5 粟根 祐樹

この話のあらすじは、父は軍人で、母は空襲の中で瀕死の重傷を負い、やがて死んでしまい、実質、中三であった清太が、四歳である妹の節子を、親との約束通りに空襲や、つらくあたる遠い親戚から守り育てていくという内容で進んでいく。しかし、節子は、栄養失調のため日に日にやつれて結局の所は死んでいく。それをさかいに清太も、生きる目標を失うように、そして食べるものも買えなくて駅の構内で死んでいく。「ざっとあらすじを書けばこのぐらいの内容であるが、もっともっと奥の深い短編である。僕はこの映画版をみていたので感想文を書くのが楽だろうという軽い気持ちでこの本を手にとったのだが、映画で表せきれない部分というものが、衝撃的な描写で表されていて、より深い情景までわかったような気がした。

さて感想だが、中三の子が四歳の妹をここまでの思いをして、戦争中の世の中をこんなに一生懸命生きていくことができることに、現代と違うものを感じたように思う。もし、僕が中三であるなら同じことができたか。中三でなくて、今ならできるかと問われると、多分無理であろうと思う。妹がもし腹へったと言えば、指を切って食べさせてやろうと思うか…それは絶対にない。本当に戦争というものを体験したことのない僕らに何割この話が理解できるのか、という気にもなったりした。何も食べられなくて苦しい妹も、兄に心配をかけまいと明るくふるまう。僕がその立場なら不平不満を言いまくると思う。時代が違うという事がこんなに人を変化させているのかと思うと、恥ずかしく思う。

この話から、人と人との思いやりの大切さと、戦争でこんなに悲劇を生んだことが信じられない現実であることをしっかりと頭にたたき込んでおこうと思う。そして、この名作を忘れることないようにしようと思う。

## 「水と建築」

A 5 三浦 紀子

## 1. はじめに

水は生物にとって、欠くことのできないものであり、それは生存の基盤であると言えるだろう。しかし、水の価値は生きるための資源というだけではなく、水そのものが定まった形を持たない故のその変化の美しさや、見る楽しさをも私たちに与えてくれる。また、自然環境に表情を与え、季節の変化を感じさせてもくれる。例えば、岩々の間に湧く水が集まり、やがて流れとなり、更に落下する滝となる様や、満ち干きする海、または、陰を映す静水などは、天地万物の恵みを感じさせる魅力的なものである。外国においても、もちろんわが国においても古くから、建築（あるいは都市という規模）と水はさまざまな形で、関わりあってきた。現在でも都市のいたるところで水を使った造形物を見ることができ、その水が建築と人々にもたらす影響や効果について考えてみたいと思う。

## 2. 水と建築

## (1) 日本の伝統

日本の建築と水との関係は庭園に始まり、古く平安時代にまでさかのぼる。日本の庭園の最初の発想は、海岸線の多い景観から来るものであると考えられる。8世紀までの大陸との往来で、海岸景観に関心が寄せられ、日本庭園として再構築されることとなった。海岸の景色として置き換えられた基本要素は泉水で満たされる池や湖で縁取られる人工の山々である。様々な入り江や山甲の形を作るために岩や丸石が使用された。自然景観に対する崇敬の念は日本人特有のもので、宗教との関連が深い。自然界全てに神々が宿るという神道の考えと仏教の“浄土”という楽園のイメージが自然景観に対する同情と尊敬を高め、親しみ深い景観の特色を生み出した。初期の庭園は野性の動物、川、小さな森、更に注意深く構成された岩や建物といったもので、自然界の雰囲気を保ちつつ泉水、せせらぎ、池のある遊園地として作られていた。“借景”の庭園は、住居構成の真髄であり、簡素なシェルターというものを超えた居住のあり方を示す。日本の造園は敷地の持

つ本来の特色を生かしながら、自然地形の美しさと立地、庭園そのものの要素を複合化させる融合デザインの技術へと進んでいった。最良の自然要素と地形の変化を、遠景というコンテキストの中で利用して、総合的な効果を達成している。

## (2) 水の利用と効果

タジ・マハールやシュノソール城に見られるように、反射プールや湖水面の静止した水は空気のような分離状態を醸し出すことができる。水面に囲まれた建物は、空や雲形が水面に反射され地面の存在がなくなって、宙に浮いているようになることもあり、光の効果も重要である。特に日に照らされた建物が暗い水面に反映したり、建物の形が銀色の鏡の表面に反映する対比が強調されたりする。

運河や水路のように長く伸びる水の表面は多様な空間を連結する。イスラムの宮殿では空間の内部と外部に水路や噴水が織り込まれ、空間の連結性を与えている。特に噴水は視覚的な節目を与え、涼しく爽やかな雰囲気を出すことができる。アムステルダムやベネツィアの運河は、基本的な交通システムとなっているだけでなく、都市形態に1つの座標軸を与え、多様な都市空間に対して一つの連結要素になっている。

水面はあらゆる方法で活発化することができる。噴水の飛沫が水面を乱したり、風により噴水の方向が変わったりする。水面下からの水泡や水があふれ出ている部分など、水流の乱れは特色ある形態を生み出す。

## 3. おわりに

水は無形で色もなく、いろいろな顔を持っていて、しかもそこには環境の質を高めたり、人の心を和ませる力さえ存在するという不思議なものである。そしてそれと建築とは文化、宗教などにおいて関わりをもち、長い歴史と伝統をつくりあげてきた。工業都市化が進み、生態・環境に関心が集まっている今、自然崇拜の文化をもつ日本に育った人間として、その伝統を何らかの形で守り抜く環境設計をしたいと思う。

### ◆参考文献：AQUATECTURE

-architecture & water-  
(Anthony Wylson)



## 新任教職員随想

### 「愛読誌との出会い」

機械工学科 野村高広

図書だよりに載せて頂けると  
いうことで、僕が2年ほど前か  
ら愛読している雑誌を2冊御紹  
介したいと思います。ちょっと  
マイナーですが、特に機械工学  
科の学生さんの中には御存知の方もいらっしゃるのでは  
ないでしょうか。



「ノスタルジック ヒーロー」、芸文社、隔月刊、  
略称「ノスヒロ」

「オールド タイマー」、八重洲出版、隔月刊、  
略称「OT誌」

両誌とも特に1960~70年代の旧車のレストア（修  
復・復元）に重きを置いています。ボディの錆の除  
去・塗装方法、事故車修理法、キャブの調整法、など  
毎回いろいろな車種についてのレポート記事が載って  
います。

また、旧車オーナーの部品確保のために、読者同士  
の旧車及び部品の売買、そして情報交換のフィルター  
としても力を注いでいます。更には、ガレージの作り  
方、解体屋の情報、工具の紹介までも載っています。  
どちらかというと、数ある車雑誌のなかではお堅い位  
置に存在していると思います。けれども、ハードカバー  
の教科書を読むよりは幾分頭が腐らずに内燃機関・工  
作法・流体力学などの知識が得られると思います。

僕がこれら2誌を読むようになったきっかけは、当  
時学生で同じ研究室のT氏との出会いでした。類は友  
を呼ぶのではないのですが、乗っていた車がたまたま同  
類（若者が見向きもしないような類）のものだったの  
です。（乾いた排気音がとても魅力的でした。）

スズキ、ジムニー（もちろん2スト、全幌）

彼のは360ccで48年式、僕のは550ccで53年式。今の  
ジムニーと違って当時ののはほとんど金属製でプラスチッ  
クはあまり使われておりません。そのため、暇さえあ  
れば、お互いの車の錆の酷さやトラブル回避の自慢話  
をしていたのを覚えています。そのうち、彼と付き合  
えば付き合うほどに彼の旧車マニア道を知らされまし  
た。実に彼はジムニーの他にキャロル360とスバル360、  
ラビット2台、部品取り車数台を保持する（まだ何台  
か隠し持っているらしい！）超レストアオタク（特  
に360ccの軽に詳しい！）だったのです。それを知っ  
たときには僕もどっぷり彼に引き込まれ、45年代の大  
古車を購入すべく彼に色々と相談していました。その  
時、彼が逐一説明するのに携えていた雑誌がノスヒロ  
とOT誌だったのです。彼が言うにはこの雑誌はレス  
トアの教科書もしくは参考書だそうです。かくして、  
当然のように彼の愛読誌が僕の愛読誌となり現在に至っ  
ているわけです。

そういえば、本校図書館にはモーターファンが置いて  
ありますね。この雑誌は特に新車、新技術の解説に  
重きを置いています。この手の雑誌は数えきれないほ  
ど店頭で置かれていますが、旧車、旧技術の解説を軸  
としている雑誌は上記の2誌だけじゃないでしょうか。  
逆に言えば、使い捨ての大好きな日本人にとっては、  
こういったレストアの雑誌はあまり受け入れられな  
いのもかもしれません。

なんだか思い付くまますると書いてしまいました  
が、少しでも興味のある方は読んでみてはどうでしょ  
うか。深みに填まるか填まらないかのどちらかです……。



## 「生活リズムの大改革」

建築学科 松野 一成

18年間の長きにわたり続いてきた私の学生生活に遂に終わりを告げる日がやって参りました。そのXデーとなる日は平成6年4月1日です。その日を境界と



し、私の生活は一般的社会人の生活とほぼ変わらないものになりました。このような文頭で文章を綴り始めたというのも、私の研究なども含めた学生生活が一般的社会人とは、天と地程かけ離れたものであったからです。ここで、わたしの学生生活についてお話しします。

私は呉工業高等専門学校（以下呉高専と略称）を平成2年3月に卒業し、豊橋技術科大学（以下技科大と略称）に編入学し、その後同大学大学院に進学し、平成6年4月に母校である呉高専に建築学科の助手として赴任して参りました。学生生活のはなしにおいて、その中心となるものは技科大での4年間の生活についてであります。

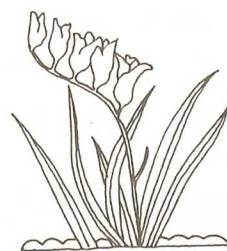
技科大での初めての年、つまり第3年次の編入学した年には、呉高専での生活と大きな差はありませんでした。それというのも世間での大学の評判は「暇と金をもてあましている奴等の集合場所。」というくらいの認識しかされておらず、事実私も「大学にはいれば遊べる。」という考えで大学にいきたくったという気持ちがか全く無かった訳ではありません。しかしそんな甘い考えは、高専からの編入生には通用しませんでした。その理由としては、技科大が世間では珍しい3学期制の大学であること、卒業に必要な単位数が膨大であることなどの理由が揚げられます。

しかし、その呉高専と大差の無い生活が続いたのはその1年間だけで、4年生になると研究室に配属され、卒業論文が主体となる生活に変わり、生活のリズムの狂いが徐々に生じ始めたのもこの頃からです。まず、講義数は減り、大学にいく時間が遅くなり始めました。さらに卒業論文のまとめにはいるとは昼と夜の逆転が起り、夜中に論文を書き、昼間に寝るという生活が始まりました。この生活は大学院に進学してもほとん

ど変化は無く、むしろ生活のリズムは変わっていくばかりでした。生活リズムの変化に最も影響を与えたのが研究ではなく実は遊びの時間であったことがあとでかんがえるとよくわかります。私の研究は実験が主体となっており、研究室の全員が同じ実験を行うという研究室であったため、その時間は大学の実験棟の使用可能時間内であるので大きな変化はありません。しかし、遊びにはそれに可能な時間の限界はなく、遊びたければいくらかでも遊べるのです。けれども、研究は進めなければならない。そういった過程で、私の生活リズムは睡眠時間の削減という形で変化を続けていきました。「人間は眠らなければならない。」その言葉が示すようにいつまでも寝ずに遊ぶことはできず、一度気合いをいれて寝ると20時間近く眠り続けていました。つまり、私の生活リズムは研究、遊び、睡眠のどれをとってもそれをしたいときに、したいだけやるというものでした。

それに変革が生じたのが平成6年4月1日でした。その日以降私の生活は非常に規則正しくなり、今では休みの日でも朝7時にきちんと目が覚めます。これは社会人として当然のことですが、時折大学生活が懐かしく思い出され、ついつい、時間が来ても眠り続けたい衝動に煽られている今日この頃です。

最後に私の読書生活についてお話しします。私は呉高専時代から読書は好きでしたが、学校の図書館を利用するときは何らかの文献を探すときのみ利用していました。唯一図書館から借りた本は「三国志」で、これは確か13巻位までであったのですが、すべて読みました。私は歴史ものが好きでそのなかでも特に三国時代が大好きだったという理由からですが、自分の生き方に少なからず影響を与えているものと思われます。この辺についてはまた機会があればお話しいたします。また、図書館に建築に関する専門書（構造系）の増加と西洋史に関する書物の増加を希望いたしまして、私のお話を締めくくらせていただきます。



## 私の推薦する本

## 「『明治』という国家」

(司馬 遼太郎 著)

一般科目 有廣圭司

この本の内容は、「太郎の国の物語」という題で('94年10月、12月)放送された。本の書名としては、『『明治』という国家』に著者によって変えられた。著者によるとそのつもりで語って来たと言っている。モンゴロイド家の一派が「明治国家」というふしぎなものを成立させたというはなしである。江戸期の日本はべつの体系の文明だったが、まったくそれとちがった体系の「明治国家」を成立させたということは、知的な意味での世界史的事件ではないかと著者はいう。明治はリアリズムの時代——透きとおった、格調の高い精神に支えられた——であり、それに対して、昭和には20年までは、リアリズムがなく、左右のイデオロギーが充満して国家、社会をふりまわしていた時代であり、どう見ても明治とは、別国家の観があり、べつの民族だったのではないかと思えるという。

イデオロギー＝正義の体系、左右のものがせめぎあい、一方が勝ち、勝ったほうは負けた方の遺伝子までとり入れ、武力と警察力、それと宣伝力で幕末の人や明治人がつくった国家をこなごなにしたという認識に立って、論を進めている。その背景には昭和とは、太平洋戦争とは、等々常に考え、問い続ける著者の強い意志が感じられる。「第2章徳川国家からの遺産」の中で、勝海舟、福沢諭吉、小栗上野介の3人のエピソード——太平洋横断をした威臨丸、米艦「ポーハタン」に乗船していた——が面白く語られている。「第11章自由と憲法をめぐる話」では明治憲法のもつ危ない点——統帥権の独立、天皇に直属——について述べられており、明治時代は破れそうなこの個所を人々が努力してふさいでおり、昭和に入ると、'28年の張作霖の爆殺、'31年の満洲事変も天皇の知らざる所で起こされ亡国への道を進んだと述べているが、この章の内容については、天皇の責任はさけられないと思っている。

独自の史観に基づいて論をひろげているが、昭和の

時代を考える1冊の本として読んでみてください。帰国後に老中の一人の問に対して「我が国とちがひ、かの国は、重い職にある人は、そのふんだけ賢うございます」と勝は答えた。現在の日本にも通用する言葉ではないかと思う。

## 「HONDA 360 STORY」

(吉田 匠〔他〕著)

機械工学科 野村高広

日本国内が敗戦のショックから立ち直り、好景気に沸く直前、ホンダの軽自動車業界への参入は水冷直列4気筒エンジン(4本のヤクルト瓶を一行に並べたようなもの)を積むミッドシップ軽トラのT360であった。今のホンダからすると不思議に思われるかもしれないが、一理由として1962年に上程された産業特別振興法案に備えて早急に自動車メーカーとしての市販の既成事実をつくる必要があったためである。その後、量産軽乗用車としてN360をフロントヤテントウムシ(スバル360)の対抗馬として世に送り込む。後発メーカーであるにもかかわらず、Nシリーズは群を抜く高回転高出力で一躍旋風を巻き起こす。ツインキャブ仕様では自然吸気でありながら、リッター100馬力を絞り出した。さらに、追加投入したスポーツ・タイプのZシリーズは新分野を創造し、水冷エンジン装着のライフシリーズは現在のFF小型車の原形となった。しかし、欠陥車問題により受けたイメージで売上げが伸びず軽自動車生産に終止符を打ち、マスクー法(排ガス規制)との兼ね合いから小型乗用車のCVCCエンジン開発に矛先を向けることとなる。……と、このようにホンダの軽自動車全盛期の雑学書として読んでもいいのですが、自動車の発展段階における問題解決の方法に注目して読んでみるとホンダの奇抜さが見えて学生さんにとっては興味深いと思います。

例えば、当時の軽自動車の法規定は、排気量360cc、全長3m、幅1.3m、スクータの免許でOKという、現在の軽自動車の法規定から考えると貧弱極まりない代

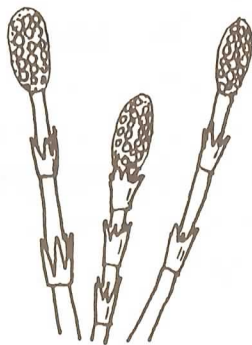
物であったのです。当然この規定では人間が4人乗るのに十分な空間は得られなかった。そこで、ホンダは他社とは異なりエンジン無視のボディ・シャーシの設計を最初に行い、エンジンの配置決定が一番最後に残したわけです。エンジンの配置は必然的に他社のRRに対して横置きFFが採用された。これにより、他社がFFを避けていた原因でもある動力軸と操舵軸が共通となるための耐久性のある等速ジョイントの入手とフロント・サスのコンパクト化の独自の設計が必要となるわけです。

さて、二輪で培ったエンジン・メーカーとしてのホンダは、限られたスペースに空冷エンジンを積むことは難しいことではなかった。しかし、二輪に対して四輪では自然空冷では冷却能が追いつかず、強制空冷するためのファンを取り付ける必要があった。更に、空冷エンジン故のフィンのびびりや機械音が室内にこもってしまうという予想外の騒音問題まで生じた。

(水冷にすればある程度解決するのだが、現時点では、本田宗一郎氏はドイツ軍キューベルワーゲンゆずりの「空冷至上主義」であった。)

こういった数々の問題にホンダが如何なる試行錯誤を行ったかについては、本書を開いて見てください。新たな視点が見えてくると思います。また本書の写真やスペック表を見るだけでも滑稽な気分になります。

余談ですが、福山自動車・時計博物館にはT360をはじめ色々な珍車が眠っております。また、スズキ党、2スト派という方には、同出版社より「スズキ・ストーリー」(小関和夫・著)が出版されておりますので御一読を。



### 「定性推論の諸相」

(西田 豊明 著)

電気工学科 加藤 裕一

物理システムは、通常物理法則に従って、多くは微分・偏微分方程式によって定量的に記述される。従って、物理システムは、確立された世界であり日常的な現象についてはそれらの法則によって説明され、型通りの方法あるいはシュミレーション技術によって問題が解けているかのように思われる。しかし、実際に実世界での物理現象に関する問題を解こうとすると、型通りあるいはシュミレーションによって解けることはそれほど多くない。モデルを与え、パラメータを設定し、結果を解釈して物理的意味を見つけるのは依然として人間の専門家であり、殆ど自動化されていない。

本書は、物理システム、特にそのダイナミックスの定性的扱い、単純化・抽象化の考え方・方法・技術を示し、上記問題点の解決を目指すことを目的としている。著者は、人工知能の研究者であり、1984年にArtificial Intelligence誌に「定性推論」という研究領域の特集号が組まれて世界の研究者に広く認知され、本格的な研究が開始されてから今日までの研究成果をかなり分かりやすく整理している。1. 因果解析、2. 定性プロセス、3. 定性微分方程式、4. 定性シュミレーション、5. 比較解析、等は興味をそそるキーワードである。

本書は、人間の定性的な思考に焦点を当て、その分析、モデル化、ソフト化、応用システム構築のヒントを提供してくれるであろう。ヒントと記したのは、タイトルに「諸相」とあるように決して確立された学問・方法論ではなく、現在多くの試しみがなされているところであり、その有効性等は未だ定まっていないことを意味する。換言すれば、何が出てくるのか、どのような発展をみせるのか分からない面白さがある。

# 新 着 図 書 1 0 選

## 「サラエヴォ・ノート」

ファン・ゴイティソーロ著 (みすず書房)

スペインの作家によるボスニア内戦ルポ。

(周藤記)

## 「外国人留学生のカルチャーショック

—ホームスティマニュアル—

多田 洋子 著 (南雲堂)

日本の風習に直面した外国人留学生の戸惑いを追跡する。

(周藤記)

## 「機械工学概論」

山田 豊〔ほか〕著 (朝倉書店)

本書は、大学工学部の機械系学科以外の学生を対象として、機械工学の基礎を理解させることを主な目標とし、教科書に適するように記述されたものである。

本書では重要と考えられる事項の内、特に機械材料、機械要素、機械工作については、それらの内容が全般的に理解出来るように、要点的に簡明な解説がつけられており、他方、材料力学、水力学、熱力学などに含まれる基礎的な理論は、平易に説明されておるので判り易く、その項目の終わりにある練習問題を併せやれば、機械に関係する各種の現象を理解し、問題を解決する基本的な考え方を身につけることが出来ると考えられる。

(池上記)

## 「難加工材の切削・研削・ドリル加工

—現場に活かす実践技術—

鈴木 節男 著 (海天堂出版)

現在、急速に開発されている“新素材”の内には、加工上も非常にやっかいな問題を生じる“難加工材”と呼ばれるものが多い。

本書では、それら難加工材を用途別に、超耐熱合金、耐食、耐熱合金、高硬度材、複合材料などに分類して、先ず工具寿命など加工に影響を与える要因等の材料特性を簡単に説明した後、その加工技術を切削、研削、ドリルの3大加工法別に紹介し、それを最適化する上での問題点も、データを添えて解説してあるので、機械工作の生産技術者を目指す学生にとっては、本書は

非常に有益な参考文献となろう。

また、本書に記載の代表的難加工材の標準的加工条件一覧表には、豊富なデータがよく整理されており、この分野では有用な技術資料と言えよう。

(池上記)

## 「物理学基礎実験」

大林康二・渡部三雄 編 (共立出版)

広島大学の一般教育の物理学実験において、長年の経験をもとにして、新たに作られた物理学実験法および基礎的物理現象の実験の教科書である。応用物理の実験のレポートを作成する時や大学偏入学で物理の科目を受験するときに、参考書として、活用していただきたい。

(辻記)

## 「演習Cではじめるプログラミング」

吉川 敏則 著 (近代科学社)

コンピュータ言語としてC言語の開発環境は充実したものが多くなり、Cでプログラミングする機会も増えてきた。Fortran言語などが主体であった科学技術計算や、アセンブリ言語で作成されていたプログラムなども、C言語で作成されるようになってきている。本書は演習を主体にしたC言語の入門書で、初心者から中級者までを対象にしている。演習問題にはすべて解答例を掲載し、発展問題を付け加えたことで段階的にC言語を理解できる構成になっている。

(野原記)

## 「図解ソーラーカー」

橋口 盛典著 (山海堂)

「夢の乗り物」と言われるソーラーカー。そのデザイン、フレーム、サスペンション、ステアリング、ボディ構成はどうなっているのか？太陽電池、モーターの構造と種類は？……。ソーラーカーについてのいろんな疑問に答えてくれます。

(河口記)



「人間は何を築いてきたか ～日本土木史探訪～」

土木学会 編 (山海堂)

日本の土木史に登場する代表的な土木施設（歴史的土木施設）のうち、現存するものについて、建設の沿革と社会的背景、諸元、技術的特徴、関係者、所在地、等々を時代順に解説し、国土形成の歴史を理解するための参考書。 (阿部記)

「土木工学なぜなぜおもしろ読本」

大野 春雄 著 (山海堂)

土木工学の幅広い領域における素朴な疑問や気になること100問について平易に解説。

通学の車内で気軽に学習できるように、設問、疑問のイメージをイラストにて表現。 (阿部記)

「ビジュアルディクショナリー 建築物」

(同朋舎出版)

古くは古代エジプトから、新しくは現代の超高層ビルまで、様々な建築を図説した建築の絵辞典である。

建築を構成する様々な部材（要素）が、イラストを用いてわかりやすく書かれている。各部材名には英訳も添えられており、建築に関する和英辞典としても利用できる。 (篠部記)

「ルイス・バラガンの建築」

齋藤 裕 著 (TOTO出版)

メキシコを代表する建築家ルイス・バラカンの作品集。彼は、ランドスケープ・アーキテクトであり、優雅でモダンな公園も多数設計している。全てカラー写真による編集で、写真は日本の建築家齋藤裕の撮影によるものである。 (篠部記)

まもろう  
返却日



## お知らせ

## ◎春休みの長期貸出と休館について

## 1. 春休みの長期貸出

貸出取扱期間 平成7年3月3日(金)  
～平成7年4月3日(月)

貸出冊数 5冊

返却期限 平成7年4月10日(月)

☆5年生の皆さんへの貸出取扱は2月28日(火)まで行います。

## 2. 春休みの休館

開架図書室の様様替えのため次の期間休館します。

休 館 平成7年3月13日(月)  
～平成7年3月17日(金)

☆上記休館の日以外は月～金 9:00～17:00(土は休館)

開館していますので、利用して下さい。

## 編集後記

学生の皆さんの読書感想文等をまとめた  
図書だよりが発行されました。発行に協力  
して頂いた皆さん、どうもありがとうございました。  
これらの読書感想文などは、主  
に授業の課題として提出されたものです。

図書館利用や図書だよりに対するご意見・  
ご要望がありましたら、是非、図書係までお  
寄せ下さい。

(図書館長補 篠部 裕)